

【プロローグ】

ユウスケ 2026年。7月5日。日曜日。

アンナ 休日の朝にもかかわらず、千駄ヶ谷駅前は凄い人だった。

エリカ 日の丸の旗、青いユニフォーム、顔にはペインティング。日本を応援する人、人、人。

ナルミ 響き渡るニッポンニッポンの大合唱。

アンナ 私は、小中高と同じ学校に通っていたユウスケに誘われて、FIFAワールドカップ2026、3カ国共同開催、ベスト16。アメリカ・ペンシルベニア州、フィラデルフィアスタジアムで行われている日本対ブラジルの一戦を、パブリックビューイングで観戦しようと、国立競技場へ向かった。

ユウスケ 前半45分。ゴール正面からフリーキックのチャンス。蹴るのは日本代表、背番号18番、久保建英。

アンナ すごい歓声！

ユウスケ 行けー！久保ー！男なら決めろー！

ナルミ 軽い助走から、左足でキック！

エリカ あ！

アンナ あ！

ユウスケ あー、外れた……。ホイッスルが鳴る。午前8時45分、前半終了。0対0のまま、ハーフタイムに入る。

【第1場】

ユウスケ 『0・0かあ！いい試合なんだけどなあ！ちよつと予想外だなあ！』

アンナ ユウスケは一人、テンション高く話し続けている。

ユウスケ 『もつと行けるはずなんだけどなあ！久保も、三苦も、全然だめだもんなあ！こんなはずじゃないんだけどなあ！おかしいなあ！』

アンナ それはまるで、日本代表がブラジル代表に勝つような話しっぷり。すると、私に話しかけてきた。

ユウスケ 『どう？初めてのサッカー観戦は。』

アンナ 『LEDビジョン、めっちゃきれい。本当にスタジアムにいるみたい。』

ユウスケ 『うん。』

アンナ 『それに、観客の一体感。すっごい鳥肌立つ。目の前で試合が行われてないのに、こんなに盛り上がるんだね。』

ユウスケ 『うん。日本中が今、日本の勝利を願って応援しているように、人の心は空を飛ぶ。』

アンナ 『空を飛ぶ？』

ユウスケ

『そう。人と人は対面していなくても、想いを馳せたり、共有したり出来る。だから俺も、今日、アンナを誘ったんだよ』

アンナ

『そう、なんだ。』

ユウスケ

『飲み物、買ってくる。』

アンナ

『行っってらっしゃい。』…ユウスケは260ブロックの階段をおりていった。ユウスケの姿が見えなくなると、ため息が出た。私はどうしてここにいるんだろう、何をやってるんだろう。こんなこと、やってる場合じゃないのに…。5日前、私は重大な決心をした。父の代から続く洋菓子店を、閉店することにしたのです。理由は、経営不振。2024年から顕著になり始めた物価高。なんとか凌いで、お店の経営を徐々に軌道に戻す、そういう計画だったけど、うまくいかなかった。材料費の高騰、光熱費の高騰。値上げするしか方法がなく、でもそうすると、逆に売れない。元の値段に戻すわけにもいかず、色々策を打ってみたけど、どれももううまくいかず、完全な赤字店に転落してしまった。まだ、やれる。そう思う気持ちもあったけど、私はお店を閉める決断をし、ホームページに「閉店します」と書き込んだ。でも、そう書き込んだものの…本当にやめていいのかな？そんな思いが沸き上がってきた。確かにお店の経営は赤字続き。このまま続けていくのは危険すぎる。でも、もう少し頑張ってみてはどうかかな？もしかしたら、経営状態が好転する可能性もあるんじゃないかな？創業者である父の想いもある。もしかしたら、何かの奇跡が起こって、例えば何かの商品に火がついて、売り上げが戻る可能性だってあるんじゃないかな？…そんなことを考えていた時、高校の同級生のユウスケから、7年ぶりに連絡が来たのです。

ユウスケ

『久しぶり。』

アンナ

『久しぶり。元気？』

ユウスケ

『元気。アンナは？』

アンナ 『元気。』

ユウスケ 『よかった。』

アンナ 『どうしたの？』

ユウスケ 『なあ。久しぶりに会おうぜ。』

アンナ 『え？』

+++++

エリカ ナルミちゃんと私はエックスで知り合った。私がナルミちゃんのアカウントに興味を持ち、

フォロワー、そしてナルミちゃんもフォロバ、やがて私たちはダイレクトメールでやりとりするようになった。そして今日、私たちは旅に出る。この試合が終わった後、二人でこの世を去り、この世ではないどこかへ旅立つのだ。

+++++

ユウスケ 『俺さ、大体の事情、知ってるんだよ。アンナのお店の事。』

アンナ 『え？何で？…7年間会ってなかったのに。』

ユウスケ 『フフフフ。』

アンナ 『え？』

ユウスケ 『それで、アンナの思いも大体わかってる。俺たち、腐れ縁だし。』

アンナ 『え？』確かに、私たちは腐れ縁。小中高と同じ学校。高校の時はクラスも部活も一緒だったし、よくつるんだ。

ユウスケ 『それでさ。いいアイデアがあるんだ。』

アンナ 『いいアイデア？』

ユウスケ 『うん。アンナは経営している洋菓子店を閉店すると告知した。でも、やっぱり撤回しようかと迷ってる。』

アンナ 『よく知ってるね？』

ユウスケ 『フフフフ。…それで、どうしたらいいかわからない。自分がどうしたいのかもわからなくなってきた。そうだろ？』

アンナ 『まあ。』

ユウスケ 『フフフフ。…まだ、やれるかも。そう思う気持ちもあるけど、続けてみて、失敗したら取り返しのつかない負債を抱えることになる。だから。』

アンナ 『だから？』

ユウスケ 『もし、決められないのなら、その決断を、何かに委ねてみるって言うのはどう？』

アンナ 『何かに委ねる？』

ユウスケ 『そう。何かの結果で、どっちに進むか決めてもらうんだよ。だって、答えが出ないんだっ
たら、何かに決めてもらうしかないだろう。』

+++++

エリカ この、満員の大観衆の中で、こんなことを考えている人間が2人、この中にいるとは、誰が
考えているだろう。ちよつと、優越感。でも…この世に生きている価値がない。自分が大嫌
い。だから私はこの世を去り、全てを終わりにすることにした。だけど、ナルミちゃんはこ
う言った。

ナルミ 『やつぱり、あんたは来ちゃダメ。』

エリカ 私はナルミちゃんが好きだから、一緒に居られればいい。ナルミちゃんについていくと言っ
ただけど、ナルミちゃんはダメの一点張り。私はずーっと粘って、ナルミちゃんについて
いきたいとおねだりをする子供のようになつて、ナルミちゃんはこう言った。

ナルミ 『私は、この計画自体、迷ってる。』

エリカ 自分で言いだしたのに、何言ってるの？…きつと、私を巻き込むことを恐れているのだろう。
これも、ナルミちゃんの優しさなのだ。でも、大丈夫。迷惑かけるようなことは何もないか
ら。…さらに駄々をこねていると、ようやく折れた。でもそれは条件付きだった。

+++++

アンナ 『まあそうだけど。でも、こんな重要な決断を、何かに委ねるってのはちよつと。』

ユウスケ 『でも、ずっと決まらなかったんだろ？なら、ずっと決まらないよ。』

アンナ 『そうかもしれないけど…ちなみに、決めてもらって何に決めてもらうの？』

ユウスケ 『明日、何があるか知ってる？』

アンナ 『明日？…サッカー？』

ユウスケ 『そう。ワールドカップ。日本初のベスト8がかかった試合。…どっちに転んでもスツキリするだろ。それに、ずっと悩んできたんだろ？息抜きも大切だよ？』

アンナ 何それ？と思ったけど、その通りだった。私はこの1年間、ずっと悩んできた。お店の事、父の事、自分の将来の事、ずっと悩んできて、物価高で経営状況がどんどん悪くなっていくのに、決断できなかった。だから私は、ユウスケの提案に乗ることにして…。

ユウスケ 賭けにしよう。

ナルミ 賭けにしよう。

アンナ 賭けにした。ワールドカップ、ベスト16、日本が勝ったら。

エリカ 勝ったら。

ユウスケ 考え直そう。

ナルミ 考え直そう。

アンナ 考え直そう。でも、日本が負けたら。

エリカ 負けたら。

ナルミ 決行しよう。

ユウスケ 終わりにしよう。

アンナ 終わりにしよう。